臨時災害放送局聴取者調査を通じた被災地教育の実践*

森　　暢　平**

目　　次

第１章　はじめに
　１．問題意識
　２．臨時災害放送局と山元町
　３．調査に参加した学生と方法
　４．先行研究との関係
　５．学生の役割と論理問題
第２章　調査結果
　１．震災直後の役割
　２．その後の役割
　３．聞かない理由
第３章　調査のまとめ

第１章　はじめに

１．問題意識

成城大学では全学共通教育カリキュラム教養講座として2012年度、「東日本大震災とその後：成城大学から考える」と題した特別講座を開設し、250人の受講者があった。グローカル研究センターにおいても2012年10月と11月、東日本大震災に関連するシンポジウムが行われるなど、成城大学内において

＊　本稿は教育研究所 2013 年度研究助成「臨時災害放送局聴取者調査を通じた被災地教育の実践」の報告書である。

＊＊　成城大学文芸学部

復興を考える試みはある。このほか各教員やゼミナールによる取り組みもあるだろうし、学生のなかには自主的に被災地ボランティアに従事したり、スタディツアーのようなイベントで現状を学んでくる者も少なくはない。

しかしながら、震災から４年近くを経たいま、多くの学生は、日々の学習、研究に追われ、大震災や原発事故を忘れがちである。経験則で言うと、過去、何らかの形で被災地を訪問したことがある学生は10人に１人か２人程度であり、この割合はこれから減り続けるだろう。

言うまでもないことだが、大震災後、津波で家を失ったり、放射線被害によって避難を余儀なくされている人がいまも存在する。「いま」「ここ」を研究対象にしている者として、東日本大震災を忘れるわけにも、触れないわけにもいかない。

私たちは、東京と地方、中心と周縁という関係のなかで、豊かさを享受し、そこにはさまざまなひずみが生じている。被災地というフィールドでは、過疎、高齢化、関係性の希薄化などの問題がより顕著に観察できるはずである。筆者が所属するマスコミュニケーション学科はフィールドワーク、インタビュー調査のようなスキルをつけるだけでなく、その結果を考察、分析する力をつけ、社会に創造的に貢献できる社会人の養成を目標としている。被災地に身を置き、そこで被災者の心情を聞くことによって、現代社会のひずみを見る。そこで学生たちは何かを感じ、何かを学ぶはずである。そのことによって、これからの大学生活、社会人生活を送るうえで何が大切なのかを考えてもらいたい――。そんな思いから、筆者によるこのプロジェクトは出発した。

具体的には、筆者が、担当する授業（マスコミ基礎演習、マスコミ演習）の受講生（主に２、３年生）を率いて、宮城県山元町の応急仮設住宅を訪問し、被災者たちの声に耳を傾けて（つまり、インタビュー調査を実施して）みた。もちろん、ただ、漫然と訪れただけでは、学習効果は少ない。そこで、筆者の授業の大きな柱である「地域メディア」、具体的には「臨時災害放送局」を切り口にすることにした。東日本大震災の際に立ち上がった臨時災害放送局を、ラジオの受け手である被災者が、どう聞いているのか／聞いていないのか、あるいは、局に対して何を感じ、何を考えているのかを、できるだけ被災者の心情に寄り沿いながら解明する研究を学生とともに実施することにしてみた。

2．臨時災害放送局と山元町

臨時災害放送局とは、大災害が起きたあと、市町村を単位にして、災害情報を伝達する小出力 FM ラジオのことである。

ここで、やや回り道になるが、臨時災害放送局というシステムができた経緯を説明しておく。災害とラジオの関係が注目されたのは、1964年６月の新潟地震の際である。地元民放である新潟放送が県警災害対策本部にマイクを設置し、津波情報や、石油タンク火災に伴う避難先を放送して、一躍脚光を浴びる。ラジオを通じて情報を得た新潟市民は多く、「災害に備えてトランジスタラジオを」と呼び掛けられるようになったのも新潟地震の後からだ。ただ、この時 NHK 新潟放送局は定時ニュース以外の災害放送が少なく、東京からの放送を続けていたことから批判を浴びる。この批判もあり、1978年の宮城県沖地震では、NHK 仙台放送局は、個人の消息からパニック防止の呼びかけなど、被災者に身近で重要な放送を流し、災害時のラジオがさらに注目を浴びる。1990年代に入ると、県域放送が基本だったラジオの枠組みに、コミュニティ放送という新しい制度が導入され、市町村を単位とするラジオが認められるようになる。そこに起きた阪神淡路大震災（1995年１月）で、郵政省は避難住民向けの生活情報などを放送するラジオ局を認める方針を打ち出した。これが「臨時災害放送局」である。兵庫県が同年２月15日に開設した「FM796 フェニックス」がその第１号となる。１カ月半という短い間であったが、県、市町村からのお知らせ、ライフラインなどの復旧状況、安否確認情報、応急仮設などの住居提供情報などを流し続けた[1)]。その後、東日本大震災のまでの間には、有珠山噴火（2000年）、新潟県中越地震（2004年）などで５局の臨時災害放送局が運営されてきた。

東日本大震災において臨時災害放送局の開設数は、被害の甚大さもあり、これまでを大きく上回る。岩手・宮城・福島・茨城の４県に30局が開設された。2014年10月現在で運営されているのは12局である。

筆者は、日本マス・コミュニケーション学会ジャーナリズム研究・教育部研究会が主催した研究会「臨時災害放送局の社会的機能と課題」（2012 年２月、於龍谷大学）で、宮城県山元町で臨時災害放送局「りんごラジオ」を運営する高橋厚氏と知り合った。元東北放送アナウンサーであった高橋氏は定年後、山元町に移り住み、悠々自適の生活を送っていたが、未曾有の災害を受け、震災から10日後、「りんごラジオ」を立ち上げた。当初は、役場内に

表　りんごラジオの現在のタイムテーブル（平日）

時刻	番組名	主な内容
9時	ありがとう！りんごラジオです	町の情報、天気予報など
10時	健康一番！	ダンベル体操など
11時	りんごラジオスペシャル	インタビューなど
12時	らじでん！まるごと情報	町の情報、生中継など
14時	りんご音楽・演芸館	音楽の特集
15時	やまもとヴォイス	町の人の声など
16時	学校・保育所・幼稚園だより	各学校だより
17時	ありがとう！りんごラジオです	町の情報、天気予報など

※2013年11月から、9時開始となった（それ以前は8時）。土日は基本的に再放送が多い。

テーブルとイスだけを置いた簡易な施設からの放送であったが、現在は、役場敷地内のプレハブの建物をスタジオとし、高橋氏を筆頭とするスタッフ7人が、9時から18時近くまでの放送を続けている（表を参照）。

山元町は、宮城県南東部の海岸沿い、福島県に接する町である（図を参照）。震災前の人口は16,704人（2010年10月）。この時点で65歳以上が31.6%、14歳以下が10.1%と過疎化、高齢化が進む町であった。震災による死者は617人、行方不明3人。住宅への被害は、全壊2,217棟（うち流出1,013棟）、大規模半壊534棟、半壊551棟、一部損壊1,138棟。津波による浸水面積は約24平方キロメートルで、町の総面積約64万平方キロメートルの37%にも及んだ。浸水域にかかる人口は8,990人（町全体の53.8%）、浸水域にかかる世帯数2,913世帯（全体の52.4%）である（山元町2014a）。応急仮設住宅は、町内の11カ所に1,030戸あり、2014年12月現在で1,343人が生活している。町内での暮らし再建を諦めて移転した世帯も多く、同月の人口は12,813人。住民登録を残したまま転出した人もいるため、実際はこれより少ないと言われている。

3．調査に参加した学生と方法

調査にあたったのは、2012年度と13年度のマスコミ基礎演習Ⅰ（前期）、マスコミ基礎演習Ⅱ（後期）、および両年度のマスコミ演習（ともに筆者が担当したクラスのみ）を受講した学生である。実際現地に向かったのは、

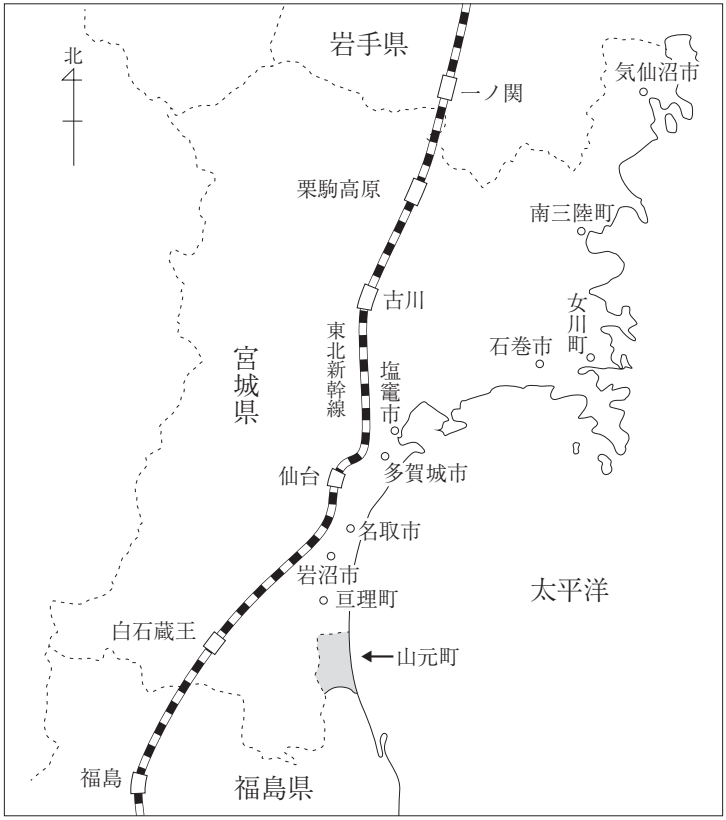

図　山元町の位置

2012年６月24日、11月25日、2013年５月19日、11月24日（いずれも日曜日）の４回。いずれも日帰りである。JR大宮駅に集合し、白石蔵王駅まで東北新幹線で向かったあと、借り上げたマイクロバスで現地に向かった。

山元町には11カ所の応急仮設住宅があるが、町の南北端にあるためりんごラジオを聴取しにくい３カ所を除く８カ所（東田１、東田２、東田３、内手、箱根、西石山原、町民グラウンド、町民グラウンド北）を調査対象とした。４回の調査に参加した学生およびTA（ティーチングアシスタント）はのべ53人である。インタビュー調査を行うことは、町および各応急仮設住宅の行政連絡員の許可のもと、事前にチラシを配布する形で告知し、さらに当日に

写真　調査の直前、りんごラジオに出演して協力を呼びかける筆者および学生

りんごラジオに出演した学生が協力を呼びかけた（写真）。インタビューは応急仮設住宅一戸ずつを訪問する、あるいは敷地内で歩いている被災者に直接話しかけ、依頼した。同意が得られた場合に録音し、録音の同意が得られなかった場合はメモを取りながらインタビューした。基本的に、学生は２人一組となって、調査。実名・年齢・職業を尋ねたが、答えたくない人には無理に聞かず、聞き取った内容は匿名の話として処理し、調査以外には使用しないことを書面で提示した。インタビューが行われた時間はいずれの調査日も午後１時から同４時半の３時間半。おおむね30分程度の調査が多かったが、なかには２時間近く話し込む被災者もいた。調査できた人数は、４回で計143人だった。

４．先行研究との関係

ところで、臨時災害放送局の聴取者調査を行うことはどんな意味があるのだろうか。やや専門的になるが、簡単にこの調査を先行研究のなかに位置づけてみたい。

東日本大震災において地域の情報インフラとなった臨時災害放送局については、村上（2012）、市村（2012b）、市村（2014）の研究があるほか、各種学会、研究会、シンポジウムでも取り上げられるなど、マスメディアを研究する者、実践する者の注目度は高い。村上（2012）は危機時に放送局を立ち上げる困難さという東日本大震災での経験を踏まえ、機材入手ルートや手続

きなどを事前に市町村に徹底する必要性や、運営資金の問題点を指摘する。また、市村（2012b）、市村（2014）は、臨時災害放送局への聞き取り調査に基づき、今後の課題を考察した研究である。このように、先行研究は、送り手の問題点、あるいは市町村への支援の課題をあげたものがほとんどである。

それでは、受け手、つまり、リスナーである被災者は、臨時災害放送をどう聞いていたのだろうか。これに対する現在の暫定的な答えは、安否・避難所・ライフライン・生活など「地域で最も必要とされるニュース、支援や復興に向けてのイベント、それに地元の民謡や音楽などコミュニティの情報をきめ細かく伝えた。……〔それらの〕ニュースや情報はまさしく地域の被災者の共感を呼ぶものだった」（平塚2012：150）ということになるだろう。程度の差こそあれ、臨時災害放送が、被災者の役に立ったのは間違いないだろうが、具体的に、どう役に立った／役に立たなかったか、を実証した研究はほとんどない。先行研究は、放送を立ち上げた事業者に焦点を当てすぎていたため、具体的に被災者がどう聞いていたのかが、解明されないままである。

上記の問いに答える研究はいまだになく、それゆえ、被災者たちが、臨時災害放送をどう聞いていたかの調査が必要であると考えたわけである。つまり、ラジオの受け手である被災者が、地域の臨時災害放送局を、どう聞いているのか／聞いていないのか、あるいは、局に対して何を感じ、何を考えているのか。それを、学生たちが応急仮設住宅を戸別訪問し、尋ねていくのである。

5．学生の役割と倫理問題

学生は、実際のインタビューのほか、事前に調査倫理の学習と質問項目の検討、事後にトランスクリプトの作成、各自のフィールドノーツ作成、調査後の結果プレゼンテーション資料の作成、授業内報告書の作成にあたった。

問題はやはり、応急仮設住宅への調査である。被災者に失礼がなく、一方で被災者の心情を深く聞くというインタビューは質的調査初学者である２年生にはやや難しく、質問の内容、得られた答えの深さには問題は残った。相手の話を聞くばかりで、そのなかからその場に応じた新たな質問を考え、会話を弾ませながら、話を継続することは、簡単ではない。さらに、特に高齢者は方言で答える人も多く、コミュニケーションには困難も伴った。ただし、

結論から言えば、学生は筆者の想像以上に、被災者たちとの距離を縮めながらインタビューをしてくれた。調査の初心者であるがゆえ、先入観を持たずに、素直に話を聞いた学生も多かった。応急仮設住宅の人々も、20歳前後の学生であるがゆえの答えやすさもあったようだった。

なお、倫理問題について、筆者が学生に対し最も注意喚起したことは、マスメディアの取材やアカデミズムの調査に不信感を持っている被災者もおり、その心情を忘れてはならないことであった。被災者のなかには、〈報道や調査は、被災者のために行われているのではない〉とその自己完結性に不信を募らせている人もいる。それでなくても震災で家や家族を失った人に無理に話を聞いて、取材・調査被害を増幅してはならない。また、快く調査に協力してくれた人であっても、そうした不信の感情には注意深く対応すべきである。この点、学生たちのインタビューにまったく粗相がなかったと断言することはできないが、細心の注意を払ったことはここに明記しておきたい。

第２章　調査結果

実際、学生は被災者からどのような話を聞き取ったのか。ここでは、学生たちが聞き取った内容のなかから、（１）震災直後の役割、（２）その後の役割、（３）聞かない理由、の３つのテーマに触れたトランスクリプトをあげ、分析してみる。トランスクリプト上の……は省略、〔　〕は筆者が言葉を補ったこと、――は言葉の余韻を指す。なお、高橋氏の言葉の引用は、山元町訪問中、学生に対して語った言葉である。

１．震災直後の役割

東日本大震災において臨時災害放送局が果たした役割について評価はむろん高い。りんごラジオにおいても同様で、震災３カ月後の2011年６月16日の山元町議会一般質問で、議員のひとりは「今回の震災において……りんごラジオの役割は大変大きく、生活支援情報、防災情報の提供に多くの町民は高い評価をしています」と発言した（山元町議会2011）。実際、震災の直後、りんごラジオはどのように被災者の生活に貢献したのだろうか。ここでは震災直後からおおむね３カ月間のことを聞いたトランスクリプトをみていく。

（1）安否情報

震災直後のりんごラジオについて聞いたところ、貴重な情報源になったとする回答が目立った。

トランスクリプト1（T1） Aさん（男性、60代、元建築士）

聞き手：りんごラジオがあって良かったと思いますか。

Aさん：避難所にいるときは情報がほとんど入ってこなかったので、高橋〔厚〕さんのご尽力で早く立ち上がったのは、数少ない情報源のなかでは素晴らしいことだと思いますね。情報がなければ孤立してしまうので、とにかく情報がほしかった。

トランスクリプト2（T2） Bさん（男性、60代、建設業）

聞き手：りんごラジオならではだと思う点はありますか。

Bさん：やっぱり震災後、山元町は〔開局が〕だいぶ早かったですよね。3・11から10日後ですか。高橋さんたちが自分たちの経験を生かして色んなことがはじまったわけですよね。被災者や町民に対して情報の伝達をやってくれましたよね。……被災者の人たちも情報伝達としてはとても良かったんじゃないかと私は思いますよ。

株式会社「サーベイリサーチセンター」が震災直後（2011年4月15－17日）に実施した「宮城県沿岸部における被災地アンケート」（調査地点は、南三陸町・女川町・石巻市・多賀城市・仙台市若林区・名取市・亘理町・山元町の8市町18避難所、有効回答451人）が興味深い結果を示している。「災害に関する情報は主にどこから入手しましたか」の質問に対し、山元町（標本数46）に限ると、通常のラジオ（NHK、民放）58.7%、口コミ30.4%、役所情報28.3%、テレビ28.3%、新聞17.4%、携帯電話13.0%についで、臨時災害放送が10.9%と高い数値を示している（複数回答可）。臨時災害放送について、他市町では、4.9%（石巻市、コミュニティ放送からの移行が3月16日）、3.6%（亘理町、新規開局3月24日）、3.3%（名取市、新規開局4月7日）となっており、山元町（新規開局3月21日）での割合は際立って高い（サーベイリサーチセンター編2011：62）[2)]。

この理由のひとつは、山元町では開局が早かったことがあげられる。りん

ごラジオの開局は震災の10日後であった。被災地域全体では12局目ではあったが、りんごラジオより早く開局されたのは、ほとんどが既存コミュニティ放送からの転換局だ。つまり、ゼロから立ち上げた局では最も早い開局のひとつであった。こうした迅速な対応も、A さん、B さんのような被災者から評価を得ているポイントなのであろう。

具体的に印象に残った放送内容を聞いたところ、多くの人が口にしたのは、安否情報であった。

トランスクリプト３（Ｔ３） Ｃさん（女性、50代、主婦）

聞き手：りんごラジオを聞いていたとき、どのような内容が印象に残っていますか。

Ｃさん：連絡のつかない人のメッセージは良かったです。自分で聞いていたわけじゃないけど、自分の名前が〔行方不明者として〕りんごラジオで流れてて、それを聞いた知人が連絡してくれたんです。伝言板の役割をしてくれました。

トランスクリプト４（Ｔ４） Ｄ１さん（男性、70代、無職）Ｄ２さん（女性、70代、主婦）=Ｄ１さんとＤ２さんは夫婦

聞き手　：震災直後、りんごラジオのどのような情報が役に立ちましたか。

Ｄ１さん：弟を亡くしているので、安否情報です。

聞き手　：今までのりんごラジオの放送で心に残った放送内容はありますか。

Ｄ１さん：心に深く残ったのは、やっぱり、亡くなった人数といった悲しい内容ですね。

Ｄ２さん：ショックでした。

震災直後のりんごラジオは、死亡者、行方不明者情報を放送していた。こうした情報が町内の「伝言板」の役割を果たしていたというのだ。携帯電話が通じにくく、被災者が知人との連絡が取りづらいとき、安否情報が役に立ったのだった。「どこの避難所に誰がいる」「誰が行方不明だ」というローカルな情報の伝達に、臨時災害放送が最も役立ったということだろう。前述のサーベイリサーチセンターの調査でも、地震発生後にほしかった情報とし

て最も多かったのは「家族や知人の安否」で、有効回答451人のうち67.4%であった（サーベイリサーチセンター編2011：60）。

りんごラジオについての被災者の回想では、生活にかかわるその他の情報、ライフライン情報は予想外に少なかった。りんごラジオがこれらの情報を流していなかったわけではなく、たとえば、自衛隊により公衆浴場が設置されたなどの多様な生活情報を流していた。これらの生活情報は、避難所の張り紙、口コミなどを含め複合的な情報源から伝わったため、受け手の印象に残っていないということであろう。ただし、高橋氏によると、どこでガソリンが手に入るなどの情報は、混乱を招く可能性があるので、放送はしなかったとのことだ。

（2）町外へ発信

震災直後の山元町では情報が遮断されていた。ラジオを聞くことはできたが、東京や仙台発の情報が主で、山元町の被災者が必要な情報は少なかった。当時の状況を語ってくれているトランスクリプトをあげる。

トランスクリプト5（T5）　Aさん（男性、60代、元建築士）T1と同一人

Aさん：人口密度で言えば、山元町は〔宮城県で〕3番目に大きな被害を受けているのに[3]、ほとんど報道されずに、情報が入らなかったのですよ。……今でも三陸の方が報道されているけど、福島県の原発にも近い山元町を取りあげてもらわなければ困るのです。公平的に報道してもらうのはなかなか難しいよ。

トランスクリプト6（T6）　Eさん（女性、60代、主婦）

Eさん：山元町って意外とニュースになってなかったんですよ。ヘリ、ニュースのやつも、〔山元まで来ないで〕戻って行ってしまうんですって。福島側の方も、相馬までは来るんですけれども山元町には来なくて――。海岸沿いも山元町はほとんど映らなくて、何で映らないんだろうっていうのは〔遠くに住む娘が〕ずいぶん心配したみたい。

調査対象者たちが口を揃えたのは、山元町の被害が外に伝わらないもどかしさであった。太平洋沿岸では仙台以北がリアス式海岸となっており、「絵になりやすいため、ニュースが多い傾向にある」（高橋氏）。しかし、仙台以南は砂浜海岸が続き、なかなか注目されなかった。福島県境にあり、仙台から遠く、在仙台の新聞社、テレビ局が入りづらいという要因もあった。

このなかで注目されたのがりんごラジオの活動である。『日刊スポーツ』2011年３月25日付が、りんごラジオを一面トップで扱うなど、被災者を支援するりんごラジオ自体がニュースとなり、町外に伝わった。りんごラジオに注目する東京メディアは多く、りんごラジオの存在が山元町へ目を向かせる契機となったのである。

（３）聴取環境

震災直後、被災者の役に立ったとされるりんごラジオだが、実際どのような環境で聞かれていたのであろう。

トランスクリプト７（Ｔ７）　Ａさん（男性、60代、元建築士）Ｔ１、Ｔ５と同一人

聞き手：りんごラジオの情報でどんな情報が一番に役に立ちましたか。

Ａさん：りんごラジオには失礼ですが、「この先どうなるのかな」とか考えていると、100％聞けないわけですよ。避難所のなかでは人の出入りが多かったし、すし詰め状態ですから。まともには聞けないんですよ。人に気を使うので、完璧には聞こえなかったな。音量を上げるわけにもいかないですから。

りんごラジオの活動を高く評価するＡさんだが、実際には「すし詰め状態で……まともには聞けな」かった実情を話してくれた。混乱状況のなか聞きたいように聞けていたわけではない状況が浮かぶ。他にも「聞ける状態にはなかった」と答えた人は少なくない。被災者には支援物資としてラジオが配布されたのだが、聞きづらい環境もあったようだ。一方、つぎのように話す人もいる。

トランスクリプト８（Ｔ８）　Ｆさん（男性、70代、無職）

聞き手：いつ、りんごラジオの存在を知りましたか。

Ｆさん：避難所にいるときに、皆で聞いていましたから。

トランスクリプト９（Ｔ９）　Ｇさん（女性、60代、会社員）

Ｇさん：情報もないから〔ラジオのあるところへ〕行って、「誰が出るのかな、誰が来るのかな」って、毎日こうやってラジオの前で椅子に座って聞いていた。もう行くところもないし、考えることも嫌だし。もう、ずっと聞いていましたよ。

聞き手：そこで、何か感じられたりとか思われたりしたこととかありますか。

Ｇさん：ああ、ほっとする、というか。〔ラジオに〕いろいろ教えてもらえて。避難してると、何の情報もないじゃない。「あー嫌だ、嫌だ」とか、「もう家がない」とか思ったけど、そのとき〔ラジオのところへ〕行ってればいろんな情報も入って、「あれも、あれもある」って。情報が入るからねぇ、良かった。

Ｆさんは、避難所で車座になって皆でりんごラジオを聞いていたと証言している。Ｇさんはさらに進んで、家が流出したあとの不安な気持ちが、りんごラジオの情報によって紛らわすことができ、ほっとしたといっている。心の拠りどころになっていたことを示すトランスクリプトである。

Ｇさんが言う「誰が出るのかな」とは、被災地応援のために山元町を訪れた有名人のことを指している。2011年４月をみると、山元町には、星野仙一（東北楽天ゴールデンイーグルス監督）、安倍晋三（元首相）、山寺宏一（声優）、キャンドル・ジュン（キャンドルアーティスト）、勝又久美子（ソプラノ歌手）、新明美恵（ピアニスト）、由紀さおり・安田祥子姉妹（歌手）、渡邉美樹（ワタミ創業者）、taca（アコーディオン奏者）、アグネス・チャン（歌手）、戸田恵子（声優、女優）＝肩書きはいずれも当時、敬称略＝らが続々と訪れており、いずれもラジオに出演している。りんごラジオは有名人来訪というメディアイベントを報じる役割を果たし、そのイベントに直接出かけたり、ラジオで聞いたりすることが、被災者の楽しみになっていたことが分かる。

（4）小括

震災直後、りんごラジオは開局が早かったことも相まって、被災者の情報源のひとつとなった。とくに、安否情報が役に立ったとの声が強く、りんごラジオを皆で聞くことで不安を紛らわし、心の支えとなっていた。さらに、町の情報が町外に出るきっかけになったことへの評価も高く、有名人来訪というメディアイベントの一翼を担い被災者に娯楽を与えていた。一方、混乱のなかの避難所ではゆっくり聞く環境になかったという人もいた。

2．その後の役割

これまでのところで、りんごラジオは震災直後、被災者に密着した情報を提供し、被災生活に貢献していたことが分かった。では、震災から時間が経って、りんごラジオの役割はどう変わっていったのか。ここでは、2012年と2013年の調査当時、被災者がラジオをどう聞いていたのかを考察していく。

（1）被災体験を客観化

被災者は震災で心の傷を負った。りんごラジオの高橋氏はほぼ毎日、町内の人たちにインタビューをし、それを放送している。りんごラジオでそうしたインタビューを聞くことによって、他者も同じ被災者だと改めて感じたり、自分の体験を客観化するきっかけになったことをうかがわせる話があった。ここではそうしたトランスクリプトをあげる。

トランスクリプト10（T10）　D２さん（女性、70代、主婦）T４と同一人

聞き手　：実際にD２さんはりんごラジオにインタビューされたそうですが、他の人の体験談や山元町の声を聞かれてどのように感じましたか。

D２さん：私たちよりも大変な目に遭った人はたくさんいると思って、私たちも木に登って助かったけど、家族を亡くした人たちもいて、りんごラジオだけでなく震災の体験談の本なんか見ても、私たちがこうやって健康でいられてありがたい。

トランスクリプト11（T11）　Hさん（女性、60代、主婦）

聞き手：高橋厚さんのインタビューを受けてどう感じましたか。

Ｈさん：夢中で喋ってて、知らない間に――〔自分の体験はもちろん〕知らないわけじゃないんですよ、知ってるんだけども、自分で意識して喋ってないのに、「あぁ本当に水の中に一晩いたんだなぁ」とか、「主人が死にそうになったのが今生きてるんだなぁ」って、改めて自分が喋ったことを聞いて思いましたね。夢中で一昼夜、水の中にいて、避難できなくって家の中にいて、そのことを話したときに、「あぁそうだわ、私たち一昼夜あの寒さの中にいて助かったんだよね」ってラジオ聞いて初めて自分が言ったことで、自分のいた立場を認識したっていうか――。夢中で喋ってましたね。

今調査のインタビューでも、家族や知人・友人を亡くした人が少なくなかった。D２さんの「私たちがこうやって健康でいられてありがたい」といった言葉は、他者の経験を身にしみて感じている感慨であった。一方、Ｈさんは、高橋氏からインタビューを受け、自分の体験を言語化することで、改めて自分の体験を実感したという。りんごラジオは体験を、語り合い、語り継ぐことで、客観化し、次代へつなぐ役割を担っているともいえよう。

（２）音楽の楽しみ

被災者の話のなかでは、りんごラジオから流れてくる音楽が、心の支えになっているという答えは非常に多かった。りんごラジオは、生放送を朝から夕方まで続け、深夜・早朝を含めその他の時間は音楽を流している。そこでは中高年、とくに高齢者が聞きやすいことを念頭に選曲しているとのことだ。音楽について語っているトランスクリプトをあげる。

トランスクリプト12（T12）　Ｉさん（女性、70代、主婦）

聞き手：りんごラジオは毎日聞いていますか。

Ｉさん：聞いています。楽しみに。歳だから懐かしい歌だとか。３日くらいポップスとかいろいろで、あと２、３日くらい演歌。それを楽しみに聞いている。やっぱり昔の歌はいいですね。

聞き手：ではやっぱり聞くだけで元気もらえたりとか――。

Ｉさん：好きだからね。楽しみだし、生きがいですね。

聞き手：時間帯はどの位ですか。
Ｉさん：〔午前〕５時40分ころかな。
聞き手：ではその時間帯になるとラジオをかけるのですか。
Ｉさん：いや、常にかけています。
聞き手：歌聞く以外で他に好きな番組はありますか。
Ｉさん：やっぱり歌だけだね。

トランスクリプト13（T13）　Ｄ１さん（男性、70代、無職）Ｔ４と同一人

聞き手　：悲しい内容があるなかで、復興に向けて前向きになるきっかけとなる放送はどのような内容ですか。
Ｄ１さん：皆さん自宅が流されたりとかして、震災直後はもとの場所に戻ることしか考えられず、精神的にも余裕がなかった。けど、朝に流れる音楽は横文字の難しい歌も流れるけど、懐かしい歌が流れると、散歩のときにとても助かるし、元気になる。

トランスクリプト14（T14）　Ｊさん（女性、70代、無職）

聞き手：りんごラジオを聞くときは、おひとりですか。
Ｊさん：うん。ひとりでねえ。音楽聞いたり、歌流してくれっちゃ？　そんなの聞いたり。
聞き手：この曲流してほしいとかありますか。
Ｊさん：だねえ。私たち人間が古いからね――。
聞き手：演歌とか？
Ｊさん：お父さんの車さは、水森かおりとか、都はるみとか、思い付いたのを買って、車さ、〔備え〕つけてあるのね。そんなのがいいねぇ。

震災後２～３年が過ぎても、りんごラジオの音楽は、聞く人を勇気づけたり、励ましたりしているようだ。そのなかでもシニア層には懐かしい歌や演歌が好まれていることが分かった。

（３）支援情報を得る

りんごラジオでは、税金免除、廃車手続きなどの情報を流している。インタビューでは、りんごラジオから得た情報を、近所の人と共有することで知

らない情報を補っているという話があった。

トランスクリプト15（T15）　B さん（男性、60代、建設業）T 2 と同一人

聞き手：りんごラジオの放送内容についてご近所の方やご家族と何か話すことはありますか。

B さん：ありましたね、やっぱりお互いにね。今度役場で支援の受付があるとか確認し合ったり、知らない人に教えてあげたりということはありましたね。

トランスクリプト16（T16）　H さん（女性、60代、主婦）T11と同一人

聞き手：りんごラジオに対して何か要望はありますか。

H さん：要望はいっぱいあるんだけども……りんごラジオでは、「義援金はいつ来ますよ」とか、「税金も何々が免除になります」「車買うにも流された人は証明書もらえば廃車しても税金が戻ってきますよ」とかっていう情報を流してくれましたよね。

高齢者が多い山元町の被災者にとってのりんごラジオは、わざわざ役所まで行かなくても情報を得られる広報誌のような役割を果たしている。そして、その情報をもとに被災者たちが、教え合う場面もあるようだ。

（4）議会情報

りんごラジオでは、定例議会の中継を行っている。インタビューでは、被災者が議会の審議に大きな関心を寄せ、議会の情報を得るためにりんごラジオを活用していることが浮かび上がってきた。

トランスクリプト17（T17）　F さん（男性、70代、無職）T 8 と同一人

聞き手：りんごラジオをどのくらいの頻度で聞いていますか。

F さん：週１、２度かな――。夕方に。

聞き手：朝は聞いたりしないんですか。

F さん：朝は聞かない。ニュース見てるから。議会の放送があれば聞く。……この間はずっと議会の放送をしてたでしょ。議会の放送になると聞いている。……議会の放送は興味ある。直接、〔議員の〕

生の声が聞けるしね。

聞き手：あーそうですよね。

Ｆさん：どの議員さんがどういうこと言ってるとかさ。そういうことはよく聞く。あと、復興の状況とか分かるでしょ。議会を聞いていればね。

トランスクリプト18（T18）　Ｄ１さん（男性、70代、無職）Ｔ４、T13と同一人
Ｄ２さん（女性、70代、主婦）Ｔ４、T10と同一人

聞き手　：現在どのくらいの頻度でりんごラジオを聞かれていますか。

Ｄ２さん：朝と夕方の散歩のときや昼間、家にいるときに情報を聞いています。

Ｄ１さん：あと、議会のときは議会の情報がとても参考になる。議会の情報は以前だと現場に足を運ばないと聞けなかったが、りんごラジオは流れてくるので参考になる。

議会の生放送を聞いている被災者は意外なほど多い。議会審議は、以前だと町議会に足を運ばないと聞けなかったが、りんごラジオが生中継をはじめてからは、ラジオを通じて知ることができるようになった。再建を目指す常磐線のルート決定や、復興住宅の建設方針など被災者にとって復興情報は極めて重要だが、『河北新報』や在仙台のテレビ局は、市町村レベルの詳しい情報までは伝えない。町の広報誌は伝わるまでに時間がかかる。そのため町議会の中継が非常に重宝されているのだろう。議会中継を聞くことが、町政に関心を持ち、生活再建をどうすればよいのか考えるきっかけになっていた。

（５）学校・保育所・幼稚園だより

議会中継と並ぶ人気番組は、午後４時から流される「学校・保育所・幼稚園だより」である。毎回、町内の中学校から保育所・幼稚園までの１カ所を選び、先生や生徒・児童が出演し、学校のトピックスを取りあげる。親世代、祖父母世代も子供たちの出演を楽しみにしているようだ。

トランスクリプト19（T19）　K さん（女性、40代、主婦）

聞き手：りんごラジオは聞いていますか。

K さん：私は仕事で聞けないけど、周りの人が皆、聞いてるから情報はまわってくるよ。いついつに「子供たちが出てたよー」ってあとから聞いたり。……なかなか仕事があるから聞けないけど、やっぱり自分らの子が出てたら聞くからね。……学校の方にりんごラジオが取材に来てるみたいで、うちの子も出たらしいよ。

聞き手：どのようなことを取材されたのですか。

K さん：学校の体育祭とか行事とかだね。子供たちは結構出てるよ。りんごラジオが積極的に学校に取材に来てるみたい。

聞き手：どのような方からりんごラジオの情報を聞きますか。

K さん：年寄りからが多いかね。私らなんかより詳しいよ。そこからいろいろ聞くね。

トランスクリプト20（T20）　L さん（女性、60代、職業不明）

聞き手：りんごラジオについて何か思われることはありますか。

L さん：りんごラジオ、存続してほしいね。小４の孫がラジオが好きみたいで、よく話しているよ。

子供たちが出演することによって、家族のコミュニケーションが増したり、近所の話題にもなっているようだ。今回の調査では、子供がいる家庭で、両親の許可を得て、子供の話を聞くこともあった。りんごラジオでは、夏休みに「子供アナウンサー」という企画を行っており、日々の学校・保育所・幼稚園だよりを含め「ラジオに出られてうれしかった」と述べる子供たちの感想も少なくなかった。

（６）便利さと温かさ

山元町の情報が、声を通して聞けるのはりんごラジオだけである。それを指摘してくれたのは、以下のトランスクリプトだった。

トランスクリプト21（T21）　D２さん（女性、70代、主婦）T４、T10、T18と同一人

聞き手　：りんごラジオは継続すべきだと思いますか。

D２さん：してもらいたい。〔町の〕広報誌もくるけど、りんごラジオは生の声で聞けるのがいいし、これからどのようにして山元町が復興していくのか、ラジオを通して直接知りたいと思います。

トランスクリプト22（T22）　M さん（女性、90代、主婦）

聞き手：りんごラジオの良いところがあったら教えてほしいんですけど。

M さん：私らみたいな出て歩けない者は、話も聞けないからうんと楽しみにしている。……テレビのニュースだけでは、ほとんど耳が遠いのでダメなんですよ。

聞き手：ラジオの方が聞きやすいですか。

M さん：〔テレビの音声は〕はっきりしてる人だといいけど、ちょっとでも、モソモソしてると、分かんないから。

聞き手：ラジオだとはっきりしてますもんね。

M さん：そう、ラジオだからね。

トランスクリプト23（T23）　N さん（男性、70代、無職）

聞き手：りんごラジオはこれからも山元町のために継続していくべきだと思いますか。

N さん：しばらくはね。……たいがい、昼間に勤めに出たり、年寄り多いわけでしょ。年寄りは文字が小さくて〔広報誌を〕読めなかったり――。〔勤めや高齢のため〕役場に行って、質問したくてもできない人もいるから――。そういう人達が結構、りんごラジオを聞いてるんじゃないかと思いますよ。

パーソナリティとの距離の近さ、声の温かみがラジオならではの魅力だろう。高橋氏をはじめとするスタッフが、話し言葉として伝えることによって温かみが増す。また、90代の M さんは、高齢で目と耳が弱くなっている。ハンディキャップを抱える高齢者には声の情報が便利だと指摘してくれた。外に出ることが難しい高齢者・障がい者の意見は、町のラジオを存続すべき

かどうかの判断に重要だと思われる。さらに、高橋氏への信頼、あるいは人気をうかがわせる回答も少なくなかった。

トランスクリプト24（T24）　G さん（女性、60代、会社員）T 9 と同一人

聞き手：高橋厚さんの印象とかってどうですか。

G さん：あのとき〔震災が起きたとき〕は、一生懸命やってくれているというのは感じましたけどね。それはひしひしと感じました。

トランスクリプト25（T25）　H さん（女性、60代、主婦）T11、T16と同一人

聞き手：高橋厚さんにお会いしたことはありますか。

H さん：あります。

聞き手：どうでしたか。

H さん：すんごく好きです。そしてねぇたまに聞くと高橋さんの声ってしびれるの、なんか安心感のある落ち着いた声で――。悲しくても、忙しくても、ちょっと聞きはじめると止まってそのまま聞いてしまう安心感のある声ですよね。

山元町の斎藤俊夫町長は「高橋さんはニュースキャスターの経験が長く、あの声を知らない人は宮城県内にはいないくらいの得難い存在」と述べている（『朝日新聞』2011年 8 月29日 夕刊）。アナウンサーらしい落ち着いた話し方、低音の響きが、りんごラジオの魅力のひとつになっている。また、高橋氏への信頼度が高いことも、被災者たちの答えが示している。被災者のための放送を続けてきたことに対し、全日本テレビ番組製作社連盟（ATP）は2011年、高橋氏に「ATP テレビグランプリ2011特別賞」を贈った。りんごラジオ自体も2014年、「坂田記念ジャーナリズム振興財団」から東日本大震災復興支援坂田記念ジャーナリズム賞が、社会貢献財団から社会貢献者表彰が、それぞれ贈られている。

（7）小括

震災から 2 ～ 3 年を経たあとのりんごラジオは、被災者たちの体験を客観化したり、音楽を通じて、その心をいやしたり、実用的に支援情報を提供す

るなどさまざまな役割があった。人気番組は、議会中継と学校・保育所・幼稚園だよりであり、それによって、被災者たちが町政を考えたり、家族や近所の人とコミュニケーションをとる触媒にもなっている。また、役場に行かなくて済むという利便性、声の温かさがあるラジオのメリットをあげる被災者がいた。また高橋氏の人気をうかがわせる回答も目立った。

3．聞かない理由

実は、インタビュー調査のなかでは「以前は聞いていたものの、現在は聞いていない」と答える人が多くいた。2012年11月25日の第２回調査では、インタビュー調査とは別に、アンケート調査も併せて行っている（調査対象者61人）[4)]。いったい、どのくらいの割合の人がりんごラジオを聞いているかの補足的な調査である。その結果、「りんごラジオを聞いている」と答えた人が26人（42.6%）、「聞いていない」と答えた人が32人（52.5%）、無回答が３人（4.9%）であり、「聞いていない」の比率が多かった。「聞いている」と答えた人のうち、聴取頻度を尋ねたところ、「ほぼ毎日」が13人、「週３回程度」が３人、「ごくまれに」が10人であった。すなわち、毎日聞いている人は全体（61人）の21.3%、週３回程度聞いている人をも含めれば61人中の16人（26.2%）が、そこそこのりんごラジオリスナーであった[5)]。ここで問題となるのは、半分以上の被災者はまったく聞いていないことだろう。ここでは、聞いていない人が、なぜ聞かないかの理由を語ったトランスクリプトをあげる。

（１）仕事の都合

最も多かった回答が、仕事によってラジオを聞くことができないというものであった。年代ごとの偏りをみていくと、30代と40代に集中している。

トランスクリプト26（T26）　Ｏさん（女性、40代、職業不明）

聞き手：りんごラジオをお聞きになられたことはありますか。

Ｏさん：あまりないですね。

聞き手：聞かない理由があれば教えてください。

Ｏさん：平日は仕事行ってるし、なかなか聞く暇がない。休みの日はやっぱり家事とか買い物にも行かなくちゃいけなくて。

トランスクリプト27（T27）　H さん（女性、60代、主婦）T11、T16、T25と同一人

聞き手：りんごラジオはどれくらいの頻度で、何曜日に聞いていますか。

H さん：大体お昼11時頃の前、色んなことを紹介する放送をやってたんですけど……。夜の音楽番組が流れてるところにも興味ある。でも、あとほとんど忙しい時間になっちゃうとなかなか……。夕方聞きたいと思うんだけどなかなか時間が〔ない〕。今日は、ましてや主人がやっぱりお医者さん行かなきゃいけないんで、時間がとれないんです。はっきり言って気が向いたとき。

トランスクリプト28（T28）　P さん（男性、30代、建設業）

聞き手：今でもりんごラジオを聞かれていますか。

P さん：いえ、全然。仕事があるのでね。現場が福島の方なんでね、なかなか聞く機会がないんですよね。

仕事の都合で聞けないと答えた人には、時間の他に場所の問題がある。たとえ職場がラジオを聞いてもいい環境だとしても、放送圏外では聞くことができない。山元町外に出るとラジオの電波は入らないのである。リスナーが放送時間帯に町内に居るとは限らないのだ。パソコンを使えば町外でも聞けるのだが[6)]、パソコンはネットワークに接続できない状態になったら使えないし、そもそも仕事中に聞くのは難しいだろう。

（2）電波状況が悪い

りんごラジオの電波状況の悪さをあげる人は案外多く、無視できる人数ではなかった。さらには、「ラジオ自体を持っていない」、また、「一般のラジオで聞くことができるのを知らなかった」などの事例もあった。

トランスクリプト29（T29）　Q さん（女性、40代、主婦）

聞き手：りんごラジオはお聞きになりますか。

Q さん：聞きません。

聞き手：お聞きにならない理由とかってありますか。

Q さん：何となくです。電波も悪いですし。

トランスクリプト30（T30）　R さん（女性、60代、いちご農家）

聞き手：りんごラジオをお聞きになったこともありますか。

R さん：もちろんありますよ。でもかからないこともあるし、今はあんまり聞かないかな。ラジオがはじまった頃は聞いていたんだけどね。聞こえない場所もあるので、聞くのは車のなかでですね。

トランスクリプト31（T31）　E さん（女性、60代、主婦）T 6 と同一人

聞き手：りんごラジオを現在聞いていますか。

E さん：家のなかでラジオをかけないので、聞かないときの方が多いですね。

聞き手：他のラジオもあまり聞くことはないですか。

E さん：そうですね、基本的には聞かないです。一応アンテナを付けてもらったんですが、大して変わりがないので———。やっぱり、ノイズの入った音を聞いているとおかしくなるので、〔りんごラジオが〕あるのは分かっていても、あまり聞かないです。

Q さんは「電波も悪い」、R さんも「聞こえない場所もある」と指摘している。「はじめに」で記したように、本調査では、りんごラジオが聴取しづらい町の北側、南側の 3 カ所の応急仮設住宅ではインタビューを実施しなかった。それにもかかわらず電波が悪いという答えは少なくなかった。りんごラジオの出力は30ワットであり、たとえば、FM 仙台（5 キロワット）と比較すると、非常に小さい。近年、家電製品や電源アダプターなどの雑音源増加でラジオ受信環境が悪化していることにくわえ、微弱電波は拾いづらく、山間部になると地形の影響もある。T31にある「アンテナを付けてもらった」とあるのは、町役場がりんごラジオが聞きやすいようにと、応急仮設住宅各戸にラジオ用のアンテナを設置したことを指す。

以下のトランスクリプトはラジオを持っていなかったり、聞く習慣がないために聞かない人のものである。

トランスクリプト32（T32）　L さん（女性、60代、職業不明）T20と同一人

聞き手：なぜラジオをお聞きにならないのですか。

Ｌさん：手持ちのラジオがないからねえ。

トランスクリプト33（T33）　Ｓさん（男性、60代、つけもの業）

聞き手：りんごラジオをお聞きにならない理由は何かあるんですか。

Ｓさん：でも、普通のラジオで聞けないよね。

聞き手：いや、聞けると思います。聞けなかったですか。

Ｓさん：あら、本当。そしたら、ぜひ、聞いてみたいわ。

震災直後こそラジオの重要性に注目が集まったが、調査してみるとＬさんのように「手持ちのラジオがない」と答える人は案外多く存在する。りんごラジオに周波数を合わせるかどうかには関係なく、そもそもラジオを持っていないという状況は、災害を経験したあとでも存在するのだ。さらに、ラジオは持っているが、通常の受信機があればりんごラジオを聞くことができるのを知らない人もいた。

このほか、「テレビ・新聞で必要な情報が得られる」など、臨時災害放送にはもう期待するものがないという答えもあった。

（３）小括

震災から日数が経過し情報の緊急性が低くなってきた調査時点では、情報はテレビニュースや新聞で十分と考える人も多く、りんごラジオの聴取率はけっして高くはない。また、日中働いている人にとって、放送時間帯が日中であるりんごラジオは聞く時間をとりづらいものであった。また、電波状況の悪さやノイズは、りんごラジオを聞かない状況を生み出す大きな要因であった。

第３章　調査のまとめ

調査の結果、震災直後のりんごラジオの役割についての評価は高く、また、状況が落ち着いたあとの町議会生中継、学校・保育所・幼稚園だよりが人気となっていた。ただし、ラジオから情報を得るという必要性は減っており、リスナーの減少が課題となっている。

りんごラジオについては当初、震災で使用不能となった役場庁舎に代わる

新庁舎のなかに「スタジオを設け、そこで放送を行う夢のような構想もあった」（高橋氏）。調査をはじめた2012年春の段階で、りんごラジオは、コミュニティ放送化を目指していた。臨時災害放送での形態では、町からりんごラジオに交付される運営費は当時も現在も1,500万円。財源は復興交付金つまりは国費であり、これに代わるスポンサーが求められていた。

ところが、本調査が進行中の2013年秋、方針が変更される。スポンサー探しがうまくいかず、しかし、復興交付金も永遠に続くわけではない。町の独自財源で運営できるほど、人口13,000人規模の山元町の財政は豊かでない。そこで、高橋氏は、コミュニティ放送への意向を断念し、放送開始５年後（2016年３月）までは、「臨時災害放送」で事業を続け、その後は放送を終えることにしたのだった。

継続の問題は、町村部の臨時災害放送に共通する。小さな町村では、地域密着のメディアの存続は無理なのだろうか。それはなぜか。学生の調査によって明らかになった新たな問いの解明は、筆者に課せられた今後の課題となる。

ところで、学生たちは、インタビュー調査の前後、海岸沿いをバスで移動し、壊れたJR常磐線坂元駅跡、中浜小学校跡を見学した。これは、学生たちに大きな印象として残っているようで、震災遺構の保存問題についても考えるきっかけとなった。

山元町ではさらに、「思い出サルベージ」というプロジェクトが進行中である。津波で泥水にさらされた写真やアルバムをがれきのなかから「救出」し、泥を掃き、洗浄し複写し、誰のものかわからなくなってしまった写真を持ち主の手元に届ける試みである。回収された写真の総数は約12万枚。山元町では、町の施設に保存される多数のアルバム、写真類を見学した。こちらは、学生たちに「記憶」について考えさせる大きなきっかけになった。

さて、このような調査に参加した学生たちの感想はどんなものなのだろうか。学生たちが書きしるしたフィールドノーツの最後に書かれた総括のなかからいくつか紹介しよう。

> 今回、宮城県への調査は、このような機会がなかったら被災地に出向くことはなかったと思います。はじめはいきなり仮設住宅を訪ねて、お話をうかがうことにとても抵抗がありました。というのも、やはり被災者

の方々は震災で家をなくし、家族を亡くした方もいる。もう２度と思い出したくないかもしれないし、せっかく前を向いて生きていても自分たちがインタビューすることで嫌な気分にならないかという不安があったからです。実際訪ねてみると、仮設に暮らす方々は皆温かく接してくださいました。りんごラジオのことだけでなく、震災当時のこともお話ししてくださったことは本当に感謝しています（２年生女子）。

なかには家族を失ったという人もいてインタビューするのが心苦しくなることもありましたが、調査するということがどういうことなのかを考えるきっかけになりました。友人と話すときは、「分かる、分かる」って想像で言ってしまいますが、今回の調査で「分かる」ということは軽々しく言う言葉ではないなと考えました。被害地の様子も、テレビで見るのとまったく違い、被害の大きさを実感しました（２年生女子）。

中浜小学校や坂元駅跡の震災後の変わり果てた姿をみて、自然の猛威の前に茫然とした。震災前にはもちろんその場所には「生活」が存在していた。それが震災により180度変わってしまった。今回インタビューした方々は誰しも生活の場が安定しないことに不安に感じている。今まで暮らしていた場所を突然奪われてしまったのだから当然であろう。私たちは大震災で直接は大きな被害を受けていない。だからこそ現地に行き、惨状を見て、現地の人々の話を聞き、理解しするしかない。……現地でインタビューに協力してくれる人を見つけるのは難しかったが、協力してくれた人のなかには「話してすっきりした」とおっしゃってくれた方もいた。話を聞くというのは単純な作業だが、それだけでも仮設の人たちの不満を和らげたり、私たちが少しでも共感したことを伝えることはできる。それに気がついた瞬間、調査に来てよかったなと本当に思った（２年生男子）。

最後の感想にあったように、学生たちの調査は傾聴ボランティア的な要素も併せ持っていたように思う。また被災地は初めてという学生が前提を持たずに、虚心に聞くことができたインタビューも多かった。

その後の学生の行動だが、調査に参加した者のなかから2013年11月、町主

催の「ふれあい産業祭」に参加し、町民の皆さんにりんごラジオのPRを行う者もいたし、成城学園の文化祭で宮城県の物産を売る出店を開きたいと動き出した者もいた（残念ながら、2014年は実現せず）。被災地に関わる調査、被災地教育の実践は筆者の授業で今後も継続するつもりである。これからも、頭の片隅でも構わないので、震災のことを考えてくれる学生が育ってくれればと願う。

（謝辞）本プロジェクトの実施にあたっては、山元町応急仮設住宅の皆さん、高橋厚さんをはじめとするりんごラジオの皆さんの協力を受けた。ここに感謝申しあげる。

（追記）りんごラジオの高橋厚さんは2014年12月17日、体調を崩され、療養のため入院中である。ご病気の快復と、マイクの前へのご復帰を、この場をお借りしてお祈りしたい（2015年１月29日）。

註

1）コミュニティ放送と臨時災害放送は、小出力でFM帯で放送され、市町村をエリアとするなど形態が似ているので混同しやすいので、念のためここに区別を記しておく。コミュニティ放送は、2015年１月現在全国で286局が放送している制度である。免許主体は基本的に民間である。つまりは、民間放送としてコマーシャルを流し、スポンサーからの広告費で運営する形態が多い（ただし、第３セクター型など他の形態もある）。東日本大震災では、既存のコミュニティ放送が、臨時災害放送に移行する例が10件あった（岩手県花巻市、奥州市、宮城県登米市、石巻市、塩竈市、岩沼市、福島県福島市、いわき市、茨城県つくば市、鹿嶋市）。この場合のメリットは、放送出力を上げられることにある。

　これに対し、臨時災害放送局は自治体に免許が交付される。実際は、NPOなどに業務が委託されていることも少なくないが、あくまで免許主体は市町村で「公設」が原則である。放送中、コマーシャルを流すことは可能だが、小さな町村ではスポンサーを探すことは難しい。日本財団などの補助金をもらうこともあるが、運営費の出所のほとんどは公費、つまりは税金である。この研究が取り上げる「りんごラジオ」の場合も、町が設置し（公設）、それを民間に業務委託する形になっている。

2）他の市町村をみると、南三陸町・女川町・多賀城市・仙台市若林区では、「臨時災害放送」と答えた人は０人であった。南三陸町での新規臨時災害放送立ち上げは５月17日、女川町では４月21日といずれも調査時点よりあとで、多賀城市と仙

台市若林区では臨時災害放送が立ち上がらなかったためである。

3）人口に占める死者・行方不明者の割合が、県内で3番目に高かったことを指している（2012年3月現在、女川町9.10%、南三陸町4.85%、山元町4.13%）。

4）インタビュー調査の対象者と重なる人もいるが、基本的には、まったく別の調査として実施した。

5）サンプリングの問題もあり、この数字はあくまで参考程度のものである。日曜日午後は、子供がいる世帯は外出することが多く、調査対象は高齢者がより多くなった。また、社会的迎合バイアスなどの要因もあり、「聞いている」の答えは、高めに出ている可能性がある。

6）コミュニティ放送・臨時災害放送を、ネット配信する以下のサイトがある。サイマルラジオ（http://www.simulradio.info）。

引用・参考文献

市村元（2012a）「大震災『臨時災害放送局』の現状と課題」『月刊民放』（2012年1月号）、pp.16－21。

―――（2012b）「東日本大震災後27局誕生した『臨時災害放送局』の現状と課題」地域社会と情報環境研究班編『日本の地域社会とメディア』（関西大学経済・政治研究会）pp115－146。

―――（2014）「被災地メディアとしての臨時災害放送局――30局の展開と今後の課題」吉岡至編著『地域社会と情報環境の変容』（関西大学出版部）pp.177－229。

金山智子（2013）「コミュニティラジオと災害：役割の再定義と支援の在り方」情報通信学会第30回学会大会個人研究発表報告

隈本信一（2011）「ジャーナリズム列伝――高橋厚（アナウンサー）」第1回－第10回『朝日新聞』2014年8月29日夕刊－9月9日夕刊。

サーベイリサーチセンター編（2011）『宮城県沿岸部における被災地アンケート』（2011年5月）http://www.surece.co.jp/src/research/area/pdf/20110311_miyagi.pdf

平塚千尋（2012）『新版災害情報とメディア』（リベルタ出版）。

松浦哲郎（2011）「大震災下でラジオが命や心を支える――南三陸町に立ち上げた臨災局」『ジャーナリズム』（2011年9月号）pp.46－55。

松本恭幸（2011）「開局して半年経った臨時災害放送局」『マスコミ市民』（2011年11月号）pp.38－41。

村上圭子（2012）「ポスト東日本大震災の市町村における災害情報伝達システムを展望する――臨時災害放送局の長期化と避難情報伝達手段の多様化を踏まえて」『放送研究と調査』（2012年3月号）pp.32－59。

新潟放送社史編纂委員会編（1967）『新潟放送15年のあゆみ』新潟放送。

大内斎之（2014）臨時災害放送局における方言利用の意義に関する考察――福島県富岡町『おたがいさまFM』を事例として『現代社会文化研究』（59号）pp.1－18。

山元町（2014a）「東日本大震災および津波の被害状況」（2014年2月21日）http://

town.yamamoto.miyagi.jp/site/fukkou/324.html
———（2014b）「平成26年度予算のあらまし」『広報やまもと』（2014年５月号）。
山元町議会（2011）「山元町議会会議録」（2011年６月14日）http://www.town.yamamoto.miyagi.jp/uploaded/attachment/730.pdf